



課題2-1 船で房総と江戸を結ぶ

ぎょうとくぶね

1 行徳と江戸を結ぶ行徳船

左は、東京都中央区日本橋小網町にほんばしこあみちょうに建てられている説明板である。その内容に説明を加える。

(1) 新川、小名木川の開削

1603(慶長8)年、江戸幕府を開いた徳川家康は、本行徳村ほんぎょうとく(市川市)特産の塩を江戸に運ぶため、小名木川と新川の二つの運河を開削した。この水路は、房総や常陸ひたち(茨城県)と江戸を結ぶ水路として重要な役割を果たした。

(2) 行徳河岸の設置

1632(寛永9)年、江戸幕府は本行徳河岸(市川市)から日本橋小網町に至る渡船を許可した。本行徳村は小網町に行徳河岸を新設し、行徳船と呼ばれた船で小荷物と旅客の輸送を始めた。

両河岸を往復した行徳船は24人乗りで、毎日午前6時から午後6時まで運行していた。

現在では、日本橋小網町にあった行徳河岸は、箱崎川が埋め立てられ、残念ながら当時の面影は見られない。

行徳ぎょうとく(ぎょうとく)河岸
所在地 中央区日本橋小網町一丁目一番先
中央区日本橋蠣殻町一丁目一番先地域
かつて、箱崎川と小網町・蠣殻町の間には、運河である箱崎川が流れていました。寛永九年(一六三二)、南葛西郡本行徳村(千葉県市川市)の村民が小網町三丁目先の河岸地を幕府より借り受け、江戸と行徳の間で、小荷物や旅客の輸送を開始して以来、ここは行徳河岸と呼ばれるようになりました。江戸と行徳とをむすぶ船は毎日運航され、成田山新勝寺の参詣などで房総に向かう多くの人びとが、この水路を利用しました。

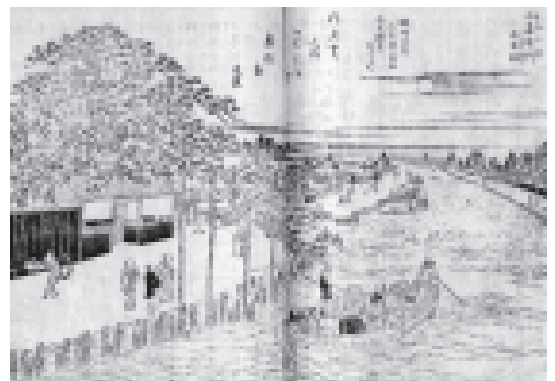
平成十四年三月

中央区教育委員会

(資料提供：東京都中央区教育委員会)

(3) 行徳船の隆盛

江戸時代中期以降、成田参詣さんけいが盛んになった。江戸の庶民は行徳河岸から行徳船に乗り、小名木川、新川を通り、本行徳河岸に上がり、船橋を通り成田に向かった。また、銚子から利根川をさかのぼり、関宿から江戸川を下ってきた船や、北関東から関宿を通り江戸川を下った船も、小名木川、新川を通過して江戸へ小荷物や旅客を運んだ。当初16艘だった行徳船も幕末期には62艘に増えたが、1879(明治12)年に廃止になった。このように河岸は物資の積み降ろしや保管場所、船の発着所として重要な役割を果たしてきた。右の絵は旅客を運ぶ行徳船である。

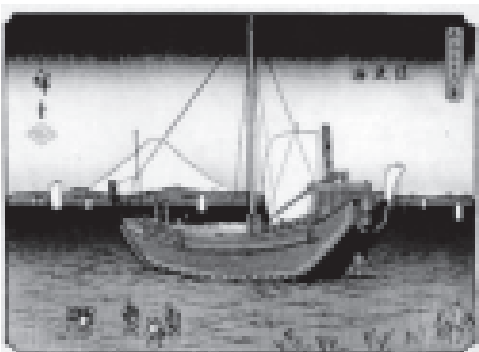


小名木川を通る行徳船

「江戸名所図会」(県立中央博物館蔵)

2 木更津と江戸を結ぶ木更津船

きさらづぶね



浅瀬につける木更津船

初代歌川広重「不二三十六景」

(木更津市郷土博物館金のすず蔵)

木更津船は、木更津湊(木更津市)と日本橋本船町もとふねちよう(中央区日本橋本町1丁目)の通称木更津河岸を結んだ五大力船ごだいりきせんである。

1614(慶長19)年の大坂冬の陣に戦功があったとして、幕府が木更津の水夫に貨物や旅客の輸送権の特権を与えたのがきっかけで往来を始めた。船は長さ約20m、幅約5.6mで木更津-江戸約51kmを4時間ほどで結び、毎日運航していた。この船は、海上では帆走し、川筋に入ると帆を下ろし、棹で川底をかいて進む仕組みで、喫水が浅い構造となっていた。19世紀半ばの木更津湊には、木更津船(五大力船)が29艘、海産物を運ぶ押送船おしおくりぶねが15艘あった。

左の絵は、遠浅であるため木更津船が湊に接岸できず、乗客は船を降り、歩いて上陸しようとしている様子を描いている。